

### 戦略会議

佐伯は、良治が禁煙を決めた経緯を品川と権藤に話した。NTSの今後にとって、重要なことに思えたからだ。

品川は

「確かに、禁煙成功例では、自分の大事なひとを受動喫煙から守りたいという理由が大きいようです。」

「そうなんです。自宅で、誰かが喫煙すれば、家族は副流煙の被害にあってしまいます。とすると、その対策が必要ではないでしょうか」

佐伯はあることを思い出した。

「権藤社長、篠山所長の研究の方はどうなっているのでしょうか？」

「あの、煙の出ないタバコのことかね」

「ええ、そうです。もし、副流煙が問題だとしたら、煙が出ないタバコが開発できれば、問題は解決します」

品川が間に割って入った。

「なんです。その煙の出ないタバコとは」

「社長がみつめてきたんですが、わが社の研究所で、煙の出ないタバコの研究をしていたひとが居たのです。社長が新所長に抜擢した篠山さんです」

「ほお。それは、なかなか興味ある研究ですね」

「ところが、研究として時代を先取りしすぎていたのか、当時の上司からは評価されなかったようです。消費者からも、煙が出ないのではタバコを吸った気がしないと不評だったらしいです。しかし、副流煙を気にして、喫煙者がタバコを止めるのだとしたら、煙を消すというのは、画期的なアイデアですね」

権藤は、残念そうに首を振った。

「それが、そうでもないんだ。目でみて煙が出ていないだけで、一酸化炭素などのガス発生は、防げないらしい。家族に害があることには変わりがないことになる」

「そうなんですか」

佐伯は残念だった。

篠山が、取り組んでいる、煙の出ないタバコや、一本で、ニコチン摂取量の多いタバコの開発は、いずれも対処療法でしかない。残念ながら、タバコが抱えている根本問題を解決するものではないのだ。

三人はジレンマに陥っていた。タバコ会社として、タバコの害を認める。これは英断である。しかし、そうすると、現在の事業に自己矛盾を生じることになる。

品川は、最近のデータを披露した。

「しかし、われわれの心配をよそに、タバコ事業は順調です。このデータを見てください。わが社は、ここ数年、増収増益です。むしろ苦戦しているのは、新規事業の方なのです」すると、権藤は納得したように頷いた。

「新規事業の分野では、わが社はノウハウを持っていないからな。ライバル企業と伍していくには、かなりの時間を必要とするだろう」

「ただし、わが社にとって、かなり不利なニュースも入ってきました」

と品川は言った。

「来年、四月から、禁煙外来が正式に健康保険の対象になります」

「そうか。それも時代の流れかもしれないな」

と権藤は言った。

佐伯は、そういう動きがあるということは聞いていたが、そんなことは認められないだろうと思っていた。これでは、喫煙行為が病気とみなされたことになる。

「わが社も、かなりのアンチキャンペーンをはりましたが、残念ながら、主張は聞き入れませんでした」

と品川は残念そうだった。

「しかし、日本では、タバコを平気で吸っている医者が大勢いますよね。何か矛盾するような気がします」

と佐伯は言った。

「まあ、そんな矛盾は、気にも留めないということだろう。医者にとっては、保険対象の病気が増えれば、御の字なのだからな」

「それにしても、これだけ、タバコの害が叫ばれているというのに、逆に消費量が増えているというのも不思議な気がしますね。それに、日本の医者のレベルが低いということは世界では常識だよ。アメリカでは、医者が喫煙などということは考えられない」

佐伯は、ずっと疑問に思っていることを口にした。

「やはり、分煙化が進んできたということが大きいのでしょうか」

最近では、非喫煙者の前では、タバコを遠慮するひとが多くなっている。喫煙所があれば、誰に遠慮することなくタバコを吸うことができる。佐伯は、塩谷の言ったことを思い出していた。

喫煙者は、常に、喫煙したいという渴望に苛まれている。ニコチンの禁断症状は、一日中続くのだ。とすれば、誰に遠慮することもなくタバコが吸える環境があれば、タバコの消費量は、必ず増えていくことになる。

「もちろん、東南アジア向けの輸出が好調ということもありますが、いずれ、この市場も飽和するでしょう。そのうえ、新しいライバルがどんどん参入してきます。」

佐伯も品川も分かっていた。たしかに、NTSの業績は好調であり、伸び続けている。しかし、それに安住しては、思いもよらないしっぺ返しを食らうだろう。実は、東南アジアにおいても、タバコ被害に対する認識が急激に高まっている。タイでは、タバコの

パッケージに、タバコによる影響で壊死した肺の写真がついている。それでも、タバコを吸ってくれる人間が多いというのが、タイのいいところなのだが。安閑としてはられない。会社を磐石なものとするには、万全の対策が必要だ。若いふたりに、それができるのだろうか。

最近、三人は週に一回、将来検討会議を開いていた。もうすぐ、NTSは生まれ変わる。しかし、その前途は多難である。

権藤は

「いままでは、政治に頼ることができたが、これからは、それも適わないだろう」と言っている。国際情勢が、日本一国の勝手を許さないからだ。もちろん、裏から手をまわすということは考えられるが、それは、両刃の剣である。

世界保健機構は、最近、タバコを目の敵にしている。世界のタバコ会社は連合軍をつかって、WHOへの対抗策を打ち出しているが、タバコに害があるという科学的なデータがあるかぎり、分が悪いのは否定できない。実際に、アメリカでの訴訟には敗訴している。世界中至るところで、タバコ会社に対する裁判が仕掛けられている。その中には、肺がんになったのはタバコ会社のせいだと理不尽な要求をつきつけてくる喫煙者まで居る。

会議の後、佐伯は権藤に呼ばれた。

「先日は、ご苦労さんだった。小枝子も楽しかったそうだ」

佐伯は、小枝子の言葉を思い出していた。本当に、この権藤が娘のことを心配して、電話の前で待っていたのだろうか。

「こちらこそ楽しかったです。それに、吉田君と田辺さんの件も、うまくまとまりました」

亜美の話に、両親は本当に驚いたそうだ。高校中退の不良とばかり思っていた亜美の相手が、実は、一流大学出のエリートだったからだ。その後、良治は、亜美の両親に正式な挨拶に行ったらしい。亜美の両親は、子供が生まれた後でいいから、ちゃんとした結婚式を挙げるように、良治を説得したようだ。

驚いたことに、良治の両親は、学校の先生をしているらしい。息子のことを、かなり心配しているようで、良治が会社をやめてミュージシャンを目指すと言った時には、勘当すると大騒ぎになったらしい。しかし、今回の結婚のことはふたりとも喜んでいるという。息子も身を固めれば、すこしは落ち着くと思っているようなのだ。

「お前も、これを機会に、ちゃんとした仕事についたらどうだ」

と良治は父に言われたらしい。それに対し、良治は

「父さん。三年だけ待って欲しい。それで、芽が出なかったら、ちゃんとした仕事につく」そう約束した。良治の両親も結婚式を楽しみにしているようだ。そして、佐伯が喜んだのは、ふたりが、籍を入れことだった。田辺亜美は、めでたく吉田亜美となったのだ。

「佐伯君。君はどうなんだ。身を固める気はないのか」

そう権藤は、佐伯に聞いた。

「わたしもこんな歳ですから、できればそうしたいと思っています。しかし、相手がある

ことですから」

佐伯は、あえて、小枝子の名は出さなかった。

「そうか。」

とだけ、権藤は言った。

## 日本レール東北

佐伯は、権藤と一緒に、日本レール東北（NR東北）の本社を訪れていた。NR東北は、日本国営鉄道が民営化されて発足した民間の鉄道会社である。NR東北は、東京を含めた東北地方の鉄道をすべて管理している巨大企業だ。

最近、NR東北は、管内の長距離列車をすべて禁煙にすると宣言して話題を呼んだ。これまで、喫煙車両を用意していたが、来年、四月からは全車を禁煙にする計画である。

権藤は、企画部長の川上と相対していた。

「権藤社長。NTSさんには、大変お世話になっていながら、このような決断に至ったことは、わが社としても心苦しい限りですが、これも世の趨勢と、ご理解下さい。」

どうやら、川上は、権藤が、NR東北が全車禁煙を宣言したことに苦情を言いにくたと勘違いしているようだ。NTSに世話になったと言っているのは、タバコ税が、国鉄の赤字返済に使われてきたことを指しているのだ。

権藤は言った。

「川上部長。われわれは、何もNR東北さんの今回の決定に不満を持っているわけではないのです。」

川上は、権藤の来訪の意図が分からないという顔をしている。

「実は、わたしもタバコが大の苦手です。喫煙車があるおかげで、新幹線に乗った時には、いつも不愉快な思いをしていました。」

「そうでしたか。」

「おたくの新幹線では、なぜかグリーン車の隣が喫煙車でした。ですから、ドアが開くたびに、タバコの煙がグリーン車に流れ込んでくるのです。しかも、車内販売の女性がタバコ臭くてかきません。ですから、全席禁煙という案には賛成なのです。」

「そう言っていただけると、私どもとしましても一安心です。実は、権藤社長のような苦情が、社の広報に寄せられていまして、苦慮しておりました。新幹線、車両は完全に機密が守られておりますので、どうしても、喫煙車両からの煙が禁煙車両にも流れてしまいます。」

「そうですね。」

「しかも、最近では、お客様だけでなく、従業員からも苦情が寄せられております。」

「従業員からですか。」

「ええ、彼らとてタバコの被害には合いたくないでしょう。あの喫煙車両の煙が充満した

中では、働きたくないとっております。」

「なるほど。それも分かります。」

「結局、車両をすべて禁煙にするのが得策だという結論に至りました。」

「当然の結論でしょう。」

「しかし、今回の決定は、NTSさんにとっては困るのではないですか。」

「確かに、喫煙できる環境がどんどん減っているのは確かです。しかし、それが問題とは思っておりません。」

「問題ではない。」

「はい、非喫煙者の方に迷惑をおかけするような喫煙環境は、当社にとってもマイナスになります。わが社のイメージを悪くするだけですから。私共としても、非喫煙者に嫌な思いをさせたくはないのです。」

「そうですか。」

川上も納得したようだ。

「これは、単なる雑談とお聞き下さい。もし、援助が得られれば、御社では、将来、完全分離型の喫煙車を走らせる気はありませんか」

「完全分離型の喫煙車？」

「そうです。つまり、車両を完全に別にしたうえで、その車両内は、自由に喫煙可とするのです。」

「ああ、なるほど、そういうことですか。それは、原理的には可能ですね」

「ええ、NTS社内の検討でも、新幹線の『はやて』と『こまち』の連結のことを念頭において可能性を検討したことがあります。これならば、喫煙者も非喫煙者も双方ハッピーですからね」

「そう言っただけだと、われわれも検討した甲斐があります」

「しかし、その案には、いくつか問題があります」

「どんな点ですか」

「まず、従業員のことが考慮されておりません。前にも言いましたが、タバコの煙が嫌いなのは、何も乗客だけとは限らないのです」

「だったら、喫煙者の従業員を当てたらどうでしょう」

「業務の管理上、うまく、そういうシフトがとれるかどうかは疑問ですね。さらに、そういうシフトがとれたとしても、まだ問題はあります」

「ほう、それは何ですか？」

「喫煙者自身からの苦情です」

「喫煙者からの苦情？」

「ええ、われわれも驚いたことなのですが、喫煙者の中にも、喫煙車両は煙たいと苦情を言われる方が多いのです」

「そうなんですか」

権藤は驚いたようだ。喫煙者自身が煙を嫌がる。これは、新たな課題である。

「実際に、禁煙車両を予約される喫煙者も少なくありません」

「それは知りませんでした。なるほど、たとえ、喫煙車両を分離してつくったとしては、事は、そんなに簡単ではないということですか」

「排煙設備を増強すればよいのですが、車両では、使える電力やスペースも限られておりますし、お金もかかります」

佐伯も、川上の言うことが分かる気がした。喫煙者だけのために、そんな設備投資はできないということだろう。

「しかし、これら問題が解決できれば、可能性はあると理解してよろしいでしょうか。」

「ええ、そのためのコスト増分を非喫煙者に負わせないという条件があるならば、可能だとは思いますが」

つまり、喫煙車両の運賃を高く設定するということだろう。しかし、佐伯は、それでは、喫煙車の導入は難しいだろうと考えていた。まず、喫煙者自身が、煙いと苦情を言っているからだ。それに、排煙設備を導入しても、狭い車両では煙が充満しやすい。コスト増を考えても実現は無理かもしれない。

とすると、将来、公共交通においては、喫煙は難しいということになる。これは、NTSにとっても厳しい現実である。

## デート

佐伯は、久しぶりに健康的な汗をかいた。寮のテニスコートで、週末は若い連中と汗をかいていたが、昔のように自由には自由に動けなくなっている。届くと思ったボレーが、もう少しで届かないこともある。やはり、年齢には勝てない。

小枝子は、スポーツ万能と良治が言っていたように、テニスの腕もなかなかだった。しかし、高校から大学までをテニス部で過ごした佐伯には手も足も出ない。

「佐伯さんって本当にテニスがお上手なのね」

「大学では、勉強よりもテニスに熱中しましたからね」

佐伯は、北東大学の体育会系のテニス部に属していた。四年生の時には、全国大会にも参加している。

佐伯は、さんざん悩んだ末に、小枝子をテニスに誘ってみた。

「汗を流すのは久しぶりです。楽しみにしていますわ」

と、小枝子は簡単に承諾してくれた。小枝子もテニスはかなり好きだという。しかし、最近では忙しくて、テニスをする時間がとれないという。

NTSは、自社のテニスコートを抱えている。佐伯は、日曜日の午後に、一面を予約した。乱打からはじめて、ボレーの練習もした。小枝子の腕を見極めるためだ。最後は、ゲーム形式で戦ってみた。佐伯は、かなり手抜きをしたが、小枝子は負けず嫌いらしく、向

きになって佐伯に挑んだ。それを、佐伯に軽くいなされて、とてもくやしそうだ。

シャワーを浴びた後、ふたりは食事に出かけた。佐伯は、本郷にある隠れ家的なフレンチレストランを予約した。もちろん、全席、禁煙である。佐伯自身はグルメではないが、健啖家の権藤に命じられて、レストランを予約するうちに、かなりの通になっている。この料理は、すべてシェフのお任せであったが、佐伯はいつも満足していた。

「佐伯さんが、あんなにテニスがお上手とは知らなかったわ」

小枝子は、食事の間もテニスのことを話題に出した。

「僕でも、小枝子さんに勝てることができましたね」

佐伯も冗談で返した。

「このワインもとてもおいしい。佐伯さんのチョイスはセンスがありますね」

「そう言っていただけると嬉しいです。いつも、社長のお供で、おいしい料理を堪能させていただいております」

「それでも、タバコ会社の社長が食事する場所が、いつも禁煙というのは、変な話ですね」

「確かにおっしゃるとおりですが、だからこそ、NTSの社長である意義があるのではないのでしょうか」

「それはどういうことですか」

「いままでのNTSは、あまりにも喫煙者の立場に偏りすぎていたということです。それでは、本当の改革はできません。喫煙の迷惑をよく知っている社長だからこそ、できる対策というものがあります」

ちょっと、演説口調になって、佐伯は少し反省した。権藤の娘の前で、こんな話を熱く語ってもしようがないのだ。

しかし、小枝子は、興味深そうに佐伯を眺めている。

「でも、喫煙の害を認めているものがトップに居るということは自己矛盾じゃない」

「それも、おっしゃる通りです。しかし、その一方で、タバコの消費量が増大しているのも事実です。残念ながら、なぜかということに答えは出し切れませんが、それならば、なおのこと非喫煙者の視点に立った方がトップに居るということが、タバコ会社にとっては大切なのではないのでしょうか」

佐伯は、せっかくのデートなのに、なぜか議論がタバコになっていることに、少し不満を覚えていた。しかし、小枝子は、話題を変えるつもりはないようだ。

「でも、理系だったら答えは簡単ですわ。タバコは身体に悪い。だったら止める。それだけのことでしょ」

「理屈で言えば、その通りでしょう。でも、理屈だけで動かないのが社会というものではないのでしょうか。小枝子さんは無用の用という言葉を知っていますか？」

「聞いたことはあるわね。物理法則ではないと思うけど」

「例えば、小枝子さんが歩いている道路のことを考えてください。小枝子さんが、歩くのに、本当に必要な道路は、小枝子さんが踏んでいるところだけですよね。ということは、

合理性をつめたら、道路のほかの部分は不要ということになります」

「理屈から言うとそうなるわ」

「だけど、もし、人間が歩くのに必要なスペースしかない道路だとしたら、安心して歩くことはできません」

「それが、無用の用ということ。つまり、わたしが踏まなかった道路の部分も、合理的には必要ないけど、実質的には必要だという意味？」

佐伯は、議論をする相手を間違えたなあと思った。

「たとえば悪かったかもしれませんが。僕が言いたかったことは、人間は意識していないけど、その存在が必要とするものはあるということです」

「タバコもそうだと言いたい」

「そこは難しいところです。いまだに、自分でも悩んでいます。こんなものが必要なのだろうか。しかし、歴史的にタバコは、長年、この社会に受け入れられて来ました。わたしは賛同しませんが、タバコ文化というひともいます。最近になって、タバコは健康に害があり、よくないものだということが一般に受け入れられつつありますが、これだけ多くのひとに浸透した習慣を急に变えることは簡単ではないと思います」

「それでは聞くけど、佐伯さん自身はどう思うの。タバコは許せるわけ」

「正直言って、わたしはタバコが苦手です。できれば、タバコの煙は吸いたくない。それが本音です」

「だったら、タバコを吸えないようにしたら。それが、簡単でしょう」

「それが、正論でしょう。でも、実現は難しいと思います」

小枝子は急に黙った。少し考え込んでいるようだ。

「父の言っていることが少し分かったような気がする」

突然、小枝子は話題を変えた。

「社長がどうかしましたか？」

「父は、あまりひとを褒めたことはないの」

「そうでしょうね。あれだけ優秀なひとですから」

佐伯は、いまは権藤に心酔していた。最初に社長室長として仕えた時は、どうかと思ったが、三年ほどつきあってみて良く分かった。大した人物である。名だたる秀才が集まる財産省で、後輩たちが自主的に、権藤スクールをつくったということも納得できる。

「その父がね、佐伯さんのことを絶賛しているのよ」

「本当ですか？」

佐伯はにわかには信じられなかった。権藤には、怒られた記憶しかない。まあ、いまとなつてはいい思い出ではあるが。

「わたしも最初に佐伯さんにあつたときは、本当に頼りないひとと思った。でも、つきあってみてよく分かったの、確かに佐伯さんは父が評価するに値するひとよ」

「小枝子さんのような立派な方にそう言っただけなのは嬉しいですが、それは、買いか

ぶりと思います」

「分かった。そんなことを言い合ってもしょうがないものね。ところで、佐伯さんに聞きたいんだけど、これからもNTSで頑張るつもりなの？」

佐伯は、どう答えようか迷った。現役社長のお嬢さんである。下手なことはいえない。しかし、正直に答えた。

「実は、悩んでいます」

「そうなの」

「ええ、社長にも言っていないんですが、はたして自分がこのままNTSに残るのがいいことかどうかは常に悩んできました」

「そうでしょうね」

小枝子は理解を示した。

「タバコ事業は、自分が生きている間は安泰でしょう。今後も喫煙者がゼロになることはありません。たとえ、WHOがタバコ攻撃をしても、先進国家にとってタバコの収益が重要な意味を持っている限り、国として、それを禁止することはできないはず。所詮、WHOも、その財源を、そういった国家に頼っているわけですから、下手にこり押しすると、資金源が断たれる恐れがあります」

「WHOは立派なスローガンを抱えているけれど、所詮、金がなければ活動を続けられないということね。しかも、その原資は、政治家に依存している」

「その通りです。結局は、堂々めぐりなんです。タバコ事業を廃止して損をするのはNTSだけではないんです。数え切れないひとが、その影響を受けてしまいます。」

佐伯はデートでこんな話をするとは思ってもいなかった。本当は、もっとロマンチックな話をする予定だったのだ。しかし、思いなおした。そんな話はもとより自分にはできない。

今日も、小枝子はひとりで帰っていった。そして帰り際にこう言った。

「佐伯さんとリターンマッチがしたいわ。今度もぜひ誘ってください。」

と。今日のデートは成功だったのだろうか。心地よい疲れが佐伯の身体に残った。

